映画・本・歴史のこと

〈第39回〉和歌山の怪人たち

有田誠（ありたまこと）京丹波町在住の映画愛好家。
写真は、和歌山県東牟婁郡那智勝浦にて筆者撮影

父親の奥野健一は、田辺の人間である。一九五六年、最高裁判事となる。

青森発上野行列車が、現福島市松川で脱線転覆、乗務員三人が死亡した。松川事件（一九四九年八月十七日）である。国鉄、東芝の労組潰しのデッチ上げ事件で、幹部ら（ほとんどが共産党員）二十人が起訴された。一九六三年、ようやく完全無罪の判決がおりた。そのとき、奥野健一は、被告人たちに有利な判決を支持している。山本薩夫監督が、『にっぽん泥棒物語』（一九六五）で、GHQと吉田茂内閣の捏造事件として、痛快な喜劇に仕立て上げた。伊藤雄之助の怪演は忘れられない。

山口県の田布施（原発がらみで何十年も揺れる祝島はその沖合）で一九五一年に起きた八海事件。「疑わしきは罰せず」の原則で一九六八年、五人中四人の被告に無罪判決を出している。今井正監督が、『真昼の暗黒』（一九五六）として、映画化した。

さて、奥野健男の祖父健太郎は、一八六四年、白浜の南隣り日置（原発建設を阻止した町）から十五キロほど入った西牟婁郡小河内で生まれた。一八八一年の大水害のおり、十七歳で農民一揆を指導した。その水害補償金で、明治法律学校（現明治大学）に入学する。卒業後、田辺で弁護士を開業した。

日露戦争中、田辺町長に当選した。敗れた前町長片山省三も同じく弁護士。その息子が、戦後初の社会党総理大臣片山哲である。この親子も田辺の人間である。

荒畑寒村（当時十九歳）は、大阪から来た菅野スガ（二十六歳）と田辺で同棲していた。ともに「牟婁新報」の記者だった。同社に菅野を紹介したのは堺利彦である。菅野が大逆事件で処刑されるのは、この五年後である。寒村の下宿向かいは、南方熊楠宅だった。

和歌山と海外渡航

奥野健太郎の実兄に出谷英一という人物がいた。一八五八年小河内の生まれ。和歌山師範田辺分校を卒業、政治運動を志し、県議会議員に当選する。一八九五年、柳原白蓮、九条武子とともに大正三美人と言われた林きむ子の夫で、広島移民会社を経営した日向輝武らとハワイに渡る。

カメハメハ王朝のハワイは、米国に併合されかかっていた。出谷は、米国の侵略に対し、和歌山県人を中心に義勇軍を結成する。リリウオカラニ女王を擁立、ハワイ独立を目論んだが、失敗。帰国して自由党、憲政党から政友会党員として和歌山で活躍した。一九〇三年、伊藤博文ら政友会幹部が、桂太郎内閣の軍拡路線に妥協したのを怒り、出谷は県下の党員二百五十余人を率いて脱党した。

なお、林きむ子は新橋の料亭浜の屋の養女として育つ。浜の屋に何年も居ついていたのが、玄洋社の頭山満と杉山茂丸だった。きむ子は、藤田まことのおばさんである。

御坊には、一八八二年、田淵豊吉が生まれている。

紀州田辺

化学者であり文芸評論家の奥野健男が書いている。

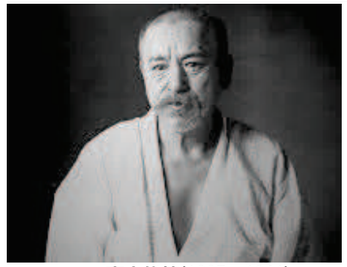
「ぼくの先祖たちには歴史を動かすような大人物はいないが、それでも幕末から明治、大正、昭和の日本の激動期に、それぞれの場所で、怒ったり、欺いたり、暴れたりして生きてきた」（ハワイ独立に賭けた南紀の青春）

田辺中学四年のとき、寄宿舎の待遇改善を叫んで、校長ボイコット、ストライキの首謀者となり放校。早稲田大学を卒業して米、英、独、仏に自費留学する。帰国後の一九二〇年、総選挙に出馬して当選。三七年まで当選五回、大政翼賛の時代に無所属を通した。米国との開戦に反対し、「いま、世界に大馬鹿者が三人いる。南にムッソリーニ、西にヒットラー、東に東条英機…」と論断した。

御坊市の西、日高郡美浜町の三尾は、一九五〇年、南海バスの停留所三尾をアメリカ村と改称した。カナダのバンクーバーを中心とする漁業移民の土地である。

一九八〇年代、三尾の人口は八百九十人、世帯数三百七十六戸中、北米に移民した不在空家が四十戸だった。カナダなど海外居住者は、二世三世を含め、約五千人とのこと。

一九〇〇年、カナダのスティーブストンに加奈陀三尾村人会を結成、会員百五十人、一九一四年、カナダの三尾村人は千五百人だった。鮭漁、缶詰工場や製材業に携わる人が多かった。この二世らが、野球チームを一九〇七年に結成している。二〇一四年、『バンクーバーの朝日』（石井裕也監督）という映画になっている。新宮の大石誠之助が、米国オレゴン大学で医師免許を取得して、医師としてカナダのブリティッシュ・コロンビア州で働いていたとき、スティーブストンにもいた。彼は日清戦争終結の年、五年半ぶりに新宮に戻る。大逆事件で大石が処刑されるのは、この十六年後である。


南方熊楠(1867～1941)

熊楠の墓(田辺市稲成町、筆者撮影)

南方熊楠

三十年前、田辺高山寺の墓に詣った。偶然、熊楠の娘の文枝さんも見えていた。文枝さんには、『父南方熊楠を語る』という本もある。

「合気道」の創始者、植芝盛平の墓も、すぐ近くである。田辺の生まれ、綾部に出口王仁三郎を訪ね、「植芝塾」を開設した。

熊楠とは何者か。箇条書き風に書いてみる。

子供のときから、記憶力が抜群、英、独、仏、スペイン、ラテン、ギリシア語など十八言語に通じていた。生物、民俗、鉱物、文学、宗教など諸分野に専門家以上の学識があった。日本でも米国でも学校の教育がバカらしくなり、退学。暮らしのため、米国ではサーカスの象使いなどをする。ピストルを手に、キューバ革命の中に跳び込み、未発見の粘菌類などを捜す。ロンドンに渡り、大英博物館の嘱託となる。ここで孫文と出あう。親交を深め、孫文はのちに和歌山の熊楠を訪ねた。大英博物館の人種差別的な館員を殴って追放され、帰国。田辺に居を定め、那智の山中を踏査。国家が神社を取込み、国家神道化する動きに激怒、警察相手の乱闘で拘留される。

熊楠旧邸、隣接して顕彰館がある
(田辺市中屋敷町、筆者撮影)

一九二九年、田辺湾へ入港の御召艦「長門」で、昭和天皇に御進講。森永ミルクキャラメルに入れた菌の標本を献上する。

戦後、白浜に行幸した昭和天皇の御製

雨にけふる神島を見て

紀伊の国の生みし

南方熊楠を思ふ